平成２２年度

第5回「SYDボランティア奨励賞」受賞者名簿

SYD SINCE 1906 財団法人 修養団

後　援：文　部　科　学　省
社団法人中央青少年団体連絡協議会
「広がれボランティアの輪」連絡会議
財団法人日本レクリエーション協会
社団法人日本キャンプ協会

受 賞 者 一 覧

（敬称略・順不同）

文部科学大臣賞

- 高知大学　高知子ども守り隊　守るんジャー　（高知県）

優秀賞

【小学生の部】 御前崎市立御前崎小学校　（静岡県）

【中学生の部】 京都市立嵯峨中学校　（京都府）

【高校生の部】 江楠学園　北陵高等学校　生徒会　（佐賀県）

【一 般 の 部】 東海大学海洋学部環境サークル E.C.O

（静岡県）

特別賞

- 清水町立清水中学校　劇団8・9組　（静岡県）
- 宮城県塩釜高等学校地域活性化班　塩釜ぼんぼん

（宮城県）

- 愛知県立日進高等学校　（愛知県）
- 京都精華大学　ホスピタルアートボランティアグループ

（京都府）

☆第5回SYDボランティア奨励賞には、42都道府県より小学生の部：3件、中学生の部：56件、高校生の部：67件、大学・一般の部：22件の計148件の応募があり、選考委員会において厳正なる選考の結果、上記受賞者が決定されました。

SYDは、文部科学省所管の社会教育団体です。青少年の健全育成を中心とした様々な活動を行っており、1906年、東京府師範学校(現在の東京学芸大学)に学ぶ蓮沼門三を中心とする青年たちによって創立されました。“愛と汗の実践”を理念として「心の教育」一筋に歩み続けて 105 年、今、みんなの幸せを願う「幸せの種まき運動」を全国的に展開しています。

文部科学大臣賞

高知大学　高知子ども守り隊　守るんジャー　（高知県）

「高知子ども守り隊　守るんジャー」は、平成16年頃、下校中の子どもが襲われたり殺害されたりする事件が全国的に多発している中で、高知大学教育学部の学生達が「教員を目指す自分達に何か出来ないか」「子どもの命を事件や事故から守りたい」と立ち上がり、“下校時間帯の子ども達の安全の確保”を目的に平成17年12月に43名の学生で発足した。

5年経った現在は、教育学部のみならず、他学部の学生も参加するようになり、50名以上の学生が隊員登録をし、支援教員1名、学校・地域・警察の方々と連携し、日々の活動を続けている。日常的な活動は、本学近隣の「朝倉小学校」「朝倉第二小学校」の児童を対象に、交通量が多い危険と思われる場所に隊員を配置すると共に、下校時の通学路の巡回パトロールを平日は毎日2回行っている。活動後は反省会を行い、他に危険と感じた場所や、より安全な下校方法等の情報の共有を図っている。又、地域の会合にも参加し、地域の一員として安全を守るという認識を常に持ち続けるようにしている。

活動中に出会った児童の「ゴミなんか川に捨てちゃっていいのに」という何気ない一言から、自分たちの住む地域の環境についてもっと考えてもらいたいと、平成19年からクリーン作戦を始めた。それがきっかけで学校や地域がより近い存在となり、最近では様々な地域の行事などにも参加するようになり、地域とのつながりが深くなってきている。また、この活動は他県の学生にも広がり、現在では香川、愛知、岡山、京都、福岡、愛媛等でも「守るんジャー」が活動を行っている。また同じ高知県内でも、高知女子大学が活動を始め、この活動がその原動力になっていると自負している。

本来ならば、子どもたちが安心して下校できる通学環境が保障されることが理想だが、現状は周りの大人が子どもたちを守る必要がある。その一端を学生が担うことには限界があると思うが、大学側の支援を得て今後も活動を継続していこうと思う。この活動は将来教師を目指す教育学部生にとって、実践的な体験の場であり、子どもや地域の方とのコミュニケーション力の育成の場にもなっており、在学中に日常的に子どもたちと触れ合い、関われる機会は、体変貴重な体験の場と言える。

今後も「守るんジャー」は、活動の場を広げていき、“Safe Kochi For Children～安全な高知を子どもたちのために～”を合言葉に、子どもたちの笑顔の為に安全を守り続けていきたい。

＜パトロールについて確認＞

＜子どもと一緒に帰ります＞

＜横断歩道で子どもを守ります＞

＜高知県公安委員会から
感謝状をいただきました＞

＜マモフェス開催＞

優　秀　賞

【小学生の部】 御前崎市立御前崎小学校　（静岡県）

「アカウミガメの飼育活動」

本校では昭和52年に「アカウミガメ飼育クラブ」による人口孵化の成功から、30年以上に亘りアカウミガメの飼育活動に取り組み、当初数名のクラブ員から始めた活動も、現在は5年生全員で取り組む活動になっている。子どもたちは、5年生になったらアカウミガメの飼育活動に取り組むことに誇りを感じ、継続的な活動となっている。この活動を通して「命あるものに対する愛情、世話をやり遂げる責任感」を育てること、「環境に関する関心を高め、より良い環境作りに進んで取り組む態度を養う」ことを目指している。

御前崎海岸に上陸するアカウミガメは国指定天然記念物に指定されている為、現在は市をあげて保護活動にあたっているが、本校は5年生の総合的な学習の時間に年間計画を作成し、子ガメの受け入れから放流までの約10カ月間を飼育活動の核として幅広い学習を展開している。

放流後は、来年も上陸して産卵できるように、全校生徒で海岸清掃「クリーン作戦」を行っている。また、御前崎のアカウミガメのことが、国語の教科書に掲載されていることもあり、問い合わせや訪問に対する説明用のリーフレットも作成し、配布している。それらの学校とアカウミガメを通しての交流も続いている。

この飼育活動を通して、学習発表会、親子活動、他校との交流など活動が広がると共に、日常生活において協力して仕事を成し遂げる気持ちが高まってきている。また、日々の飼育活動やクリーン作戦を通して、環境のことを、地域、さらに地球規模で考えていく必要に気づくまでに、環境への関心が深まってきている。

この飼育活動は地域や家庭の協力を得て、子どもたちは自信と誇りを持ち、この活動を核とした広がりのある学習が出来ているので、この活動を継続し、さらに深まりのあるものにしていきたいと考えている。また、県外の学校からの問い合わせの機会を活かし、アカウミガメの飼育活動を通じた地球環境の保全について、情報発信、情報交換を行っていきたいと考えている。

＜子ガメの受け入れ式＞

＜イワシとイカをミンチにしてカメの餌づくり＞

＜体についたイワシの脂をブラシで取る＞

＜カメの放流＞

【中学生の部】京都市立嵯峨中学校　（京都府）

「地域とともに行うボランティア活動」

本校は世界的な観光地である嵯峨野・嵐山を含む校区であるため、奉仕活動は環境保全やおもてなしの心（この地を訪れる人に喜ばれる事や気遣い）を軸としている。学校内の活動も重要であるが、多くの人との協働や、社会での役割を果たす事の苦労や喜び、多様な人から与えられる刺激等、地域社会でのみ得られるものもあり、地域と学校が結びつくことで生徒が伸び、奉仕活動をすることで、生徒のさらなる成長が促せると考え、地域と共に行うボランティア活動を行っている。

本校が、地域社会で実施している主な奉仕活動は、「大堰川の水草取り」（3年生全員）、「桂川清掃」（公募）、「有栖川清掃」（全校生徒）、「愛宕古道灯ともしの手伝い」（部活動）、「嵯峨中パレード」（全校生徒）、「京都嵐山花灯路への協賛」（全校生徒）、「老人ホームへの訪問や太鼓演奏」（生徒会と太鼓隊）、「敬老の集いでの太鼓演奏」（募集による太鼓隊）、「嵯峨嵐山にふさわしい土産物の商品開発」（3年生全員）、「嵐山の植林活動」（生徒会）など、いずれも地域と学校が連携して実施するものである。

「大堰川の水草取り」は、オオカナダモが異常繁殖し、船の運航を妨げ、景観を壊し、異臭を放ち、観光地にふさわしくない状況なっている為始めた活動で、機械や薬剤よりも人力による除去が効果的であるため、地域の人々と共に3年生が腰まで水に浸りながら作業を実施、4年目を迎えた。

10月に行う「嵯峨中パレード」は本校で製作した本格的な御輿や鉾を中心に250名の生徒が、環境保全と観光振興を訴えるアピールをしながら約2．5kmのパレードをするもので、6月から全校生徒がそれぞれの役割に分かれて準備し、アピールする標語をクラス単位で考え行うもので、10年目となった。

5年目となった「京都嵐山花灯路への協賛」は、多くの観光客を招くために会場での和太鼓演奏や全校生徒で作った竹行灯と3年生が制作した路地行灯を会場に飾りつけている。「商品開発と嵐山の植林活動」は、「嵯峨嵐山のみやげものの企画書づくり」で3年生が商品を開発し、地元の商店で販売してもらい、得た利益を老人ホームへの寄附や植林に使う苗木の購入に充てている。

今後も生徒が活躍できる場・人の役に立ったと感じられる場を学校側が意識的に企画し、ボランティア活動を進めていきたい。

＜大堰川の水草取り＞

＜嵐山での植林活動＞

＜京都嵐山花灯路への協賛＞

＜嵯峨中パレード＞

＜老人ホームで和太鼓の演奏＞

【高校生の部】江楠学園　北陵高等学校　生徒会　（佐賀県）

「私たちも地域の一員」

北陵高等学校生徒会は、生徒が中心となり、より良い学校にしようという目標をもって多くの活動を行い45期を迎えた。学校をより良いものにするには、生徒達自身が学校が好きであることも大切だが、地域の方々にも評価され、認められるということが大切なのではないかと考え、北陵高等学校のことを多くの人に知ってもらうために地域交流やボランティア活動に目を向け、積極的に実践してきた。

以前から行っていた通学路の清掃活動は学校行事に組み込まれたもので、生徒会の役員も、言われたからやっている、というものだった。そんな中、環境委員長が自ら毎日校内の清掃を行い、その姿が役員の意識を変え、さらに多くの生徒たちも積極的に関わるようになり、地域の方から「ありがとう」「御苦労様」と声をかけてもらい、各運動部の有志たちも活動に参加し、活動が広がった。

本校は、電子科、電気科、建築科、土木科、自動車科、航空科、生活文化科の工業系・福祉系の専門高校で、最初に生活文化科の生徒と生徒会役員で独居老人宅の清掃活動に取り組んだところ、高い窓やエアコンの清掃、蛍光灯の交換など、高齢者の方々が困っていることがわかった。それにより、現在は電子科、電気科がエアコンや蛍光灯の点検清掃の活動を、自動車科では高齢者の方の自動車の点検を先生方と協力して行うようになった。さらに、以前から部活動としてボランティア部、和太鼓同好会が福祉施設や児童センターなどで人形劇や紙遊び、和太鼓の演奏活動も行っている。それらの活動から本校がボランティア活動に積極的であることが知られ、臓器・骨髄移植バンクなど、いろいろな団体からキャンペーンやイベントの手伝いの依頼が来るようになった。

これらの活動を続けていることで、多くの人とふれあい、少しずつ本校のことを理解し、知ってもらうことができた。そして私たちは協力し合い、支え合ってきたことを知り、さらに社会や誰かのために役に立っているという喜びを実感し、仲間との絆をより一層深めることができるなど、とても大きな成果を残していると感じている。

この地域貢献、ボランティア活動を喜んでくださる方々の気持ちは私達にもっと頑張れる力を与えてくれ、最高のサイクルができていると考えている。学校をよくしていきたいという意思は代々後輩に受け継がれていき、今まで以上にボランティア活動に取り組み、地域との交流を深めていきたい。

＜独居老人宅の電気回り清掃＞

＜福祉施設での車椅子清掃＞

＜学校周辺の清掃＞

＜体育大会で園児と交流＞

【大学生の部】 東海大学海洋学部環境サークルE.C.O（静岡県）

「すんぷ☆エコアクション」

「すんぷ☆エコアクション」とは、静岡における漂着物問題の根本的解決を目的とした市民参加型の清掃イベントで、その運営は東海大学海洋学部と静岡大学の学生を中心に、現役大学教授やNPO関係者といった環境事業に関わる社会人とで構成されている。

本サークルは、定期的な活動として月に一度、清水三保科海岸で清掃活動を行っているが、海岸の特有な地形や海流の影響で、海上ゴミの漂着頻度が高いため、清掃後もすぐにゴミが流れつき、根本的な問題の解決にはなっていなかった。そこで、海の流域を考えた漂着物問題調査を行い、ゴミのデータの集計を行い、そのデータを基に発生源を特定し、その上でより効果的な解決策を考えることで漂着物の根本的な解決を目指していこうと考えた。

従来の海岸清掃は単発的な活動が多いことからデータは少なく、また、行政区分の関係上、流域を考えた川～海の広域的な調査が存在しないため、当イベントで静岡市内の河川、海岸、市街地、山中等各地域を市民の方々と共同で清掃し、ゴミを可燃、不燃、ビン、缶、ペットボトルに分別し、回収したゴミの数量を種類ごとにデータ化し、そのデータを参考に、マップの作成や、対応策を考察し、データやマップを一冊の報告書にまとめ、図書館や参加団体へ寄付したりHPへの掲載などの方法で市民に情報をフィードバックしている。

清掃イベントは短期間、広範囲での清掃活動の為、多くの市民の協力が必要となるが、2005年から始めた活動は広まり、昨年は2000人以上の参加があった。会場の近くの住民が参加することで環境意識も高まり、ゴミの投棄防止にもなる。また親子での参加、中学生等の参加により、子どもへの環境問題意識や知識をもたせることができるため、将来の環境改善に繋がっていくと思われる。

漂着物問題は、短期間で解決はしないが、環境の良いきれいな場所は、新たなゴミの投棄を防ぐことになる。当イベントは年一回であるが、継続していくことが重要であると感じている。今後も地域の方々と連携し、継続発展させていき、将来的には静岡だけでなく県外にもこの活動を広めていきたいと考えている。

＜子どもたちとの清掃活動＞

＜回収したゴミの分別＞

＜調査清掃後の実行委員＞

＜定例会議の様子＞

特　別　賞

清水町立清水中学校　劇団８・９組（静岡県）

劇団8･9組は本校の特別支援学級の生徒全員（知的クラス8名、自閉症･情緒クラス3名）で編成された演劇グループである。特別支援学級の生徒は苦手な分野はあるが、授業以外では通常学級の生徒と何ら変わらない魅力や特性があることから、もっともっと周りの人に認められ、のびのびと地域で生活できないかと考え、演劇活動に取り組むこととなった。

清水町には「一人暮らしのお年寄りの会（やまゆりの会）」があり、毎月交流会を行っており、この会に定期的に参加させて頂く機会を得、町の広報に取り上げられたことで、小学校や保育園からも訪問依頼が来るようになった。この交流が設定されたことで、コミュニケーション能力を高めたり、必要な小道具を自分達で考案し、作成するといった自立を促す生活体験の場の拡大へと繋がっていった。昨年12月の交流会では、「水戸黄門」の劇で、印籠を取りだす名物シーンをお年寄りの方に実際に演じてもらい楽しんでもらおう、12月なので、黄門様が劇の終わりにサンタに変身してプレゼントを配ろう等々、人のために活動できる喜びを感じながら生き生きとした取り組みが見られる学習へと広がりを見せた。実際に交流して分かったことだが、お年寄りは、障害の有無に関わらず、生徒との触れ合いを喜んで下さり、セリフを間違えても、声が聞き取り難くても、その若々しさや一生懸命な姿を心から応援してくれる身近なサポーターであった。

さらに、役場の噴水清掃を行う機会を得た。自分たちがきれいにした箇所が手に取るようにわかり、短時間で達成感を得られるということ、また、その活動が地域の方から誉められるという、生徒が地域に貢献できる貴重な活動となっている。

この活動は、障害を抱えた生徒が地域を活性化させる存在になりうることを証明でき、素晴らしい学びの場となった。今後は、この生徒たちの活躍を多くの人に知ってもらう努力をし、この活動を継続していきたい。

＜水戸黄門がサンタに変身＞

＜保育園でも劇を披露し交流してほしいと依頼＞

←＜噴水清掃＞

→＜清掃後、職員から感謝の言葉を頂き、自分達の達成感・肯定感を感じた＞

宮城県塩釜高等学校地域活性化班 塩釜ぼんぼん　（宮城県）

塩釜市は仙台近郊の港町で、古くから水産業が盛んであったが、同業の低迷を背景として経済状況の厳しさから、市のアーケード店舗の閉鎖、周辺市町や郊外に大型ショッピングセンターが誕生し、市内の集客力が低下し、観光による経済発展の為に設けられた旅客船ターミナルの施設内でもテナントが撤退している状況の中、平成19年度に「塩釜市の活性化のために地元高校生のアイディアを聞きたい」という地元大学生と

本校女子生徒の対談をきっかけに、町の活性化について考え、行動しようという意識が高まり、平成21年度に部活動団体と認可し、学校としても地域貢献活動を支援する体制を整備した。この地域活性化班名を通称「塩釜ぼんぼん」と名付け、今年度は16名が活動をしている。「ぼんぼん」とは、塩釜を「ぼんぼん」盛り上げようという意味が込められており、生徒自らが命名した。このような経緯を背景に、塩釜の地域活性化について地元高校生の視点から考え、ボランティアとして行動することを通して活性化の一助になることを目指し活動を行っている。

水揚げ日本一である塩釜のマグロを使った商品を、平成20年度にマグロのハンバーガー「まぐまぐバーガー」、平成21年度にマグロのアメリカンドッグ「まぐちゃんドッグ」を完成させた。地方紙に掲載され注目を浴びたが、「まぐまぐバーガー」は商品化にまでは至らなかったが、「まぐちゃんドッグ」は、市内のイベントでの試食販売後のアンケートから好評を得、翌22年に塩釜商業協同組合から依頼があり、総会の場で地元ホテル代表の目にとまり、商品化と支援の申し出を頂いた。

塩釜にしかないオリジナル商品を実現する為、調理人と生徒が定期的に集まり、試食会を行い、意見交換しながらホテルメニューへの取り入れや、販売方法を検討。塩釜高校同窓会での試食、意見募集。市商工観光課の協力を得ながら地域、観光客向けPR活動等を行ってきた。

今年9月に開設された「まちの駅」の地元特産コーナーで冷凍食品として販売されるようになり、売上も予想以上で、評判も上々である。マスコミの紹介もあって、まちの駅の集客に貢献している。今後は、地元の様々な商店でも販売して頂けるよう門戸を広げ、PR活動を行い、観光客増加に結び付けて行きたい。

＜ホテル料理人と共同で試作品作り＞

＜まちの駅でまぐちゃんドッグ試食配布＞

←＜完成したまぐちゃんドッグとポスター＞

→＜地元食材の料理の試作＞

愛知県立日進高等学校　（愛知県）

本校は名古屋市に隣接する文教地区日進市にあり、全校生徒371名の全日制普通科高校である。愛知県は今後30年の間に、マグニチュード8.0以上の東南海地震発生率が60～70%、東海地震に至っては、何時起きてもおかしくない現状にある。その為、災害が起こった際、積極的に救助や支援が行えるよう、様々な地震防災・減災に関するボランティア活動を6年間継続して実践している。

主な活動は、保育園や小学校への出前ボランティア防災教育や地域・公共連携を重視したイベントの開催であるが、歌やダンス、ミュージカル等「防災楽習（防災を楽しみながら学ぶ）」のスタイルを取り入れたことで、生徒自らも楽しみながら生き生きと実践している。中でも最初に取り組んだ「ぼうさいサンバ」は評判を得、地域の保育園、小学校、施設等から多くの依頼を頂いた。

また、地域住民を招いて学校内「避難所体験」を実施したり、今年度は水害に対する防災・減災教育ボランティアとして、「洪水ハザードジオラマ」を生徒が3カ月かけて作成し、それを利用してのワークショップ開催、参加した地域住民40名程と一層の災害への危機意識や連帯感が生まれた。さらに、近郊の天白川でのクリーンウォーキングを実施、川の清掃を通して、現流域の様子や下流域への影響について理解し、洪水予防

の基礎を学ぶことができた。

このような活動を実施してきた事で、学校と地域の信頼関係が確立し、生徒の自己肯定感の高揚、コミュニケーション能力の向上等が見られた。今後はいかに多くの生徒に、日常的に防災・減災ボランティアを心掛けさせるかが課題であるが、この実践を継続していきたいと考えている。

＜洪水ハザードジオラマ＞

＜ぼうさいサンバ！＞

＜大型ぼうさいカルタ＞

京都精華大学 ホスピタルアートボランティアグループ

（京都府）

この活動は平成20年9月、京都赤十字小児病棟の看護師長から本学へ「建物の老朽化により、病棟の病室や廊下等が大変暗いので、病気治療中の子ども達を励まし、元気になれるようなホスピタルアートを描いてほしい」との依頼から、この活動が始まった。制作範囲は、病室27室・面会室2室・食堂・トイレ・ナースステーション、処置室や廊下40m等広範囲に及ぶ広さで、2009年2月から描きだし、現在、病院の廊下は全長40メートルのパステルカラーの森に変わり、病室内は様々な動物達が遊ぶ優しい空間となった。絵を見るためにトイレに行く子どもや、病棟で働く看護師さん達からも「癒される、元気がでる」と言ってもらえた。

病院との打ち合わせで病棟を「森の中」とイメージし、原画を決め、毎回10名程のボランティア学生が大学から片道約1時間かけて病院へ通い、交代で制作を進めた。また、学園祭でホスピタルアート展を行い、原画の展覧会やポストカードの作成・販売を行うと共に、ボランティア募集と新たな活動場所の募集の為の広報活動を行った。

しっかりと考えた原案と制作は、学生が芸術大学生としての力を試せ、空間デザインを徹底した、高クオリティな成果を示せたと思っている。また、社会と関われる場となり、入院している子ども達や看護師さん等多くの方々に制作過程を含め、刺激や影響を与えることができたと感じている。自分達にとっても、知識、経験共に大学では学べない事も多く、ボランティア参加者にも良い経験ができたと思う。

長期間に渡り、一体一体心をこめて描いた動物達を見てもらうことで、アート活動への理解促進ができ、絵の持つ力を充分に発揮し、良い結果を出せたと感じている。アート、社会、人を繋げることで、社会を取り巻く環境をさらに潤し、賑やかに明るくできればと思っている。

＜トイレの壁画＞

＜病室廊下の制作風景＞

＜病室内の鳥の親子＞

＜病室内の制作風景＞

SYDボランティア奨励賞 実施要項

財団法人修養団では、昭和57年より平成13年まで「蓮沼門三社会教育奨励賞」により多くの優れた社会教育活動を実践した個人、グループ・団体を顕彰して参りました。この実績を踏まえ、平成18年に創立100周年を記念し、新たに「愛と汗の精神」を信条とする《幸せの種まき運動》の実践者を顕彰する「SYDボランティア奨励賞」を設立しました。

主　催：SYD（財団法人修養団）
後　援：文部科学省、社団法人中央青少年団体連絡協議会、財団法人日本レクリエーション協会、社団法人日本キャンプ協会

1. 趣　旨

今日、次代を担う青少年の健全育成はますます重要な課題となっている。そこで、ボランティア活動の分野で著しい活動を実践し、優れた業績をあげたグループや個人を顕彰することにより、青少年のボランティア活動を促進するとともに、活動の習慣化を図り、生きる力や豊かな心を育むなど青少年の健全育成に寄与する。

2. 対　象

原則として、ボランティア活動を実践している学校（生徒会、クラス、クラブ等）やPTA、子ども会等のグループ及び個人

3. 選考基準

次の項目に該当し、高い評価を得られたもの

(1) ボランティア活動の分野で著しい活動を実践し、優れた業績をあげ、今後の活動に期待のできるもの
(2) ボランティア活動に創意工夫や新しい方策を取り入れ、新機軸を拓き、今後の活動に期待のできるもの
(3) ボランティア活動を受け入れ、施設の利用、改善、充実に努め、活動の活性化に寄与している施設またはそれを推進する活動
(4) 青少年の健全育成を目的としたボランティア活動を実践し、将来が期待されるグループ及び個人

4. 選考方法

学識経験者等9名に選考委員を委嘱し、選考委員会にて決定する。

5. 表　彰

文部科学大臣賞　1点

クリスタルトロフィー（表彰状）、副賞（活動奨励金20万円またはSYD「青年ボランティア・アクション in フィリピン」へ2名招待）

優秀賞　4点（小学生、中学生、高校生、大学生・一般の部）

クリスタルトロフィー（表彰状）、副賞（活動奨励金10万円）

特別賞　数点（小学生、中学生、高校生、大学生・一般の部）

クリスタルトロフィー（表彰状）、記念品

6. 贈 呈 式

期日：平成23年2月11日（平成22年度）

会場：SYDホール

7. 募集方法

都道府県教育委員会、社会教育団体、青少年団体、学識経験者およびSYD組織、関係者に推薦を依頼するとともに、新聞、雑誌等のマスコミに広報を依頼する。

8. 応募方法

所定の様式に必要事項を記入し、活動報告書の上に添付して下記まで送付する。

9. 締め切り

平成22年12月1日（平成22年度）

10. 申込み・問合せ先

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ケ谷 4-25-2　SYDボランティア奨励賞 係

TEL：03-3405-5441 FAX：03-3405-5424　E-mail：info@syd.or.jp http://www.syd.or.jp/

選 考 委 員	
青柳　修治（全日本中学校長会事務局長）	明石　要一（千葉大学教授）
大野　曜（[財]日本女性学習財団理事長）	仲野　好重（大手前大学教授）
長沼　豊（学習院大学教授）	山田　一功（日本PTA協議会相談役）
國分　正明（[財]修養団理事長）	山﨑　一紀（[財]修養団専務理事）
青木　富造（[財]修養団青年部長）	

過 去 受 賞 者 一 覧

（敬称略・順不同）

第1回（平成18年度）

文部科学大臣賞

- 京都市立京都御池中学校（京都府）

優秀賞　　＊【高校生の部】 該当なし

【小学生の部】鏡石町立第一小学校（福島県）
【中学生の部】庄原市立東城中学校（広島県）
【 一般の部 】合同ボランティアネットワーク（神奈川県）

特別賞

- 国崎翠・吉居夏奈（北海道）
- 美幌町青少年育成協議会（北海道）
- 喜多方市立山都第一小学校（福島県）
- 熱海市立小嵐中学校（静岡県）
- 加藤ひとみ（岐阜県）
- 伊江村立伊江中学校（沖縄県）

第2回（平成19年度）

文部科学大臣賞

- 香川県立多度津水産高等学校（香川県）

優秀賞　　＊【小学生の部】【 一般の部 】 該当なし

【中学生の部】木更津市立鎌足中学校（千葉県）
【高校生の部】学校法人高倉学園豊橋中央高等学校（愛知県）

特別賞

- 天草市立城河原小学校（熊本県）
- 志布志市立通山小学校（鹿児島県）
- 東横学園中学・高等学校　中学2年（東京都）
- 多治見市立多治見中学校（岐阜県）
- 神奈川県立相原高等学校「相こっこプロジェクト」（神奈川県）
- 熊本県立盲学校（熊本県）
- 立命館大学国際部国際協力学生実行委員会（京都府）
- ブラジルを美しくする会（ブラジル）

第3回（平成20年度）

文部科学大臣賞

- 学校法人篠ノ井学園　長野俊英高等学校　郷土研究班（長野県）

優秀賞　　＊【小学生の部】 該当なし

【中学生の部】新宮町立新宮中学校相島分校　相島少年消防クラブ（福岡県）
2008 年度屋久島町立小瀬田中学校2年生「笑顔」プロジェクト〈鹿児島県〉
【高校生の部】更級農業高等学校　農業クラブ　農業応援団「ねこの手隊」〈長野県〉
【 一般の部 】八雲ジュニアサポーターズクラブ（島根県）

特別賞

- 尾道市立三幸小学校（島根県）
- 鳴門市第一中学校　ボランティア部（徳島県）
- 富山県立小杉高等学校　生徒会（富山県）
- 富貴中おやじの会（愛知県）
- 高知市朝倉里山を造る会（高知県）

第4回（平成21年度）

文部科学大臣賞

- 豊田市立崇化館中学校　麦の会（愛知県）

優秀賞　　＊【一般の部】該当なし

【小学生の部】日吉子どもサミット（滋賀県）
【中学生の部】名古屋市立はとり中学校（愛知県）
【高校生の部】中央学院高等学校　生物部（千葉県）

特別賞

- SYD北海道クラブ（北海道）
- 横浜市立岡村中学校（神奈川県）
- 長野県飯田風越高等学校　国際教養科3年（長野県）
- みんなでつくる学校　とれぶりんか（大阪府）
- 広島文化学園短期大学　食物栄養学科（広島県）

Happy Seeds

SYD『幸せの種まき運動』とは

－みんなでまこう！幸せの種－をスローガンとして、まわりの人々に、社会に、一粒でも多くの‘幸せの種’をまいていこうという運動です。さりげなく、よろこんで、出来るだけ‘幸せの種’をまいていきましょう。種をまくときは、あなたの“笑顔”という栄養分を添えて！

《三つの‘幸せの種’》

☆こんにちは！という‘ふれあいの種’
☆どうぞ！という‘思いやりの種’
☆ありがとう！という‘よろこびの種’